

進路選択を取り巻く「変化」を捉える

Topics

1

教員が考える進路指導上の課題トップは「入学者選抜の多様化」。
学校研究では入試方式についても具体的に確認させたい

多様化する入学者選抜に課題が集中

高 校教員が考える進路指導上の課題として、長年首位だった『進路指導を行うための時間の不足』を上回り、『入学者選抜の多様化』が最上位となった。選抜形式の複雑化、年内入試の早期化が影響しているとみられる。同調査では大学入試の早期化について、6割以上の高校が好ましくないとも捉えており、大学入試改革によって高校の進路指導の負担は全国的に拡大していることが窺える。

【高校教員が考える進路指導上の課題TOP5】

	2024年	2022年	2021年
入学者選抜の多様化	62.0% 1位	55.2% 2位	48.6% 3位
教員が進路指導を行うための時間の不足	60.4% 2位	62.6% 1位	57.0% 1位
学習意欲の低下	54.7% 3位	45.5% 6位	45.0% 4位
進路選択・決定能力の不足	53.2% 4位	51.9% 3位	51.8% 2位
学力低下	50.2% 5位	46.9% 4位	42.4% 7位

リクルート進学総研「高校教育改革に関する調査2024」より

毎年変わり続ける入学者選抜の状況

2 025年入試では、国公立大学でも総合型選抜で共通テストを免除する学部数が260から410にまで急増。学校推薦型選抜でも半数以上の学部で同様の傾向が見られ、受験生の進路選択に新たな選択肢が生まれる可能性もでてきている。各大学は予定する選抜形式をオープンキャンパスやWEBサイトで公開する。自身の進路に最適な選択が行えるよう、生徒自身で情報を集めるような機会を早期から重ねていきたい。

年内入試で共通テストを免除した学部数(国公立大学)

	2024年	2025年
総合型選抜	260	410
学校推薦型選抜	334	356

文部科学省「令和7年度国公立大学入学者選抜の概要」より

Topics

2

年内入試対策は、夏の入試直前期に集中。
早期化する志望校の絞り込みと重ねて、対策はコツコツと進めたい

入試直前期に集中する年内入試対策

年々増加する年内入試、その合格に欠かせないのが小論文、志望理由書、面接の対策だ。2024年春に大学に合格・進学した大学1年生がこれらの対策を行った時期は、年内入試利用者を中心に「高3の7～9月」が最も多い様子。直前期ではあるが夏期休暇など時間的な余裕ができた際に取り組み受験生が多いことがわかる。しかし、今後は対策時期もより早期化してくるだろう。

小論文・志望理由書・面接対策の開始時期

	一般選抜	学校推薦型選抜	総合型選抜
高校入学前	0.4%	0.2%	0.9%
高1	1.4%	1.8%	1.8%
高2	3.9%	9.4%	13.6%
高3の4～6月	5.4%	13.9%	19.0%
高3の7～9月	7.6%	38.0%	47.5%
高3の10～12月	7.0%	25.2%	12.5%
高3の1～3月	13.2%	2.1%	1.2%
対策していない	61.1%	9.4%	3.6%

旺文社：大学1年生が回答「リバスナビ「大学受験生に関するアンケート」2024年春

約10年変わらない、進学者が役立てる情報源

今やAIを使えば誰でも上手な文章を書ける時代、本心ではないことが志望理由書に書かれている場合はすぐに見抜かれてしまう。面接は本当に本人が書いたものかを確認する意図もあるだろう。志望校の絞り込みが早期化するならば、何を学び、どう将来に生かしていきたいのかという意欲や情熱を集め言葉にしておくことは、どんな時期から始めても早すぎることはない。それぞれの進捗に応じた情報収集と整理は絶えず行いたい。

進学者が最も役に立った進学関連情報源

1位	オープンキャンパス・学校見学会
2位	進学情報誌やダイレクトメール
3位	先生からの情報やアドバイス
4位	パンフレット
5位	進学情報サイト(スマホ)

リクルート進学総研「進学センサス2022」より

Topics

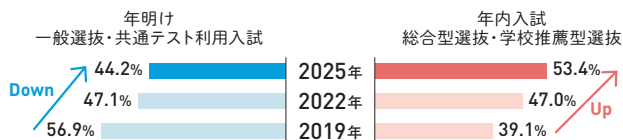
3

年内入試増加を背景に、オープンキャンパスは「志望校群」巡りに変容？
振り返りは『学びの動機』を深めることに焦点を！

年内入試の増加と進路検討の早期化

2 025年4月大学進学者の「年内入試」合格者が53.4%とついに過半数に達した。参考値ではあるが年明け入試を9.2ポイント上回り、3年前と比較しても更に進路検討の開始時期自体が早期化していることがうかがえる。夏のオープンキャンパスは、早期化する年内入試において、「動機ある選択」を実現するための戦略的な情報収集の場となる。生徒自身が、単に「やりたいこと」だけでなく「何を学ぶか」を明確にしながら臨むことで、より実りある機会となるだろう

【年明け・年内の入試比率(大学進学者全体)】

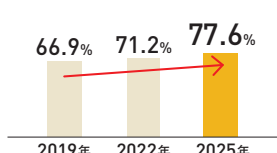


両データ共に「2025年卒高校生の進路選択行動の実態～進学センサス2025～」リクルート進学総研より

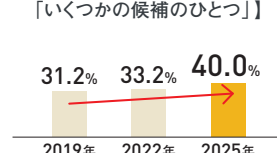
オープンキャンパス参加における「志望校群」化

2 025年4月進学者のオープンキャンパス参加率は77.6%と更なる増加傾向にあるが、参加時に「第1志望だった」割合は減少し、「いくつかの候補のひとつだった」と回答する割合が増加した。これは、生徒が複数の大学を「志望校群」としてオープンキャンパスを巡る実態がうかがえる。生徒には、漠然とオープンキャンパスに参加するのではなく、自身の「学び」を深掘りし、納得感ある選択へ活用していく意識が求められるだろう。

【オープンキャンパスへの参加率】



【参加時の入学意向「いくつかの候補のひとつ」】



進路選択の「納得」を高めるには？

Topics

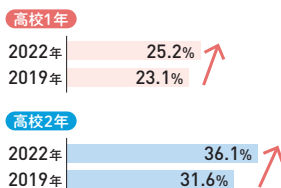
1

年内入試の広がりと共に早期化する進路検討の開始時期。
じっくり吟味し、進学先選びも「動機のある選択」を大切にしたい。

早期化する進路検討の開始時期

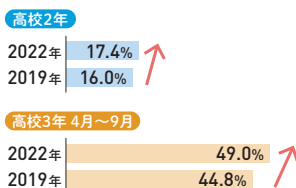
年 年内入試を通じた進学者が全体の半数近くになった結果、志望校の絞り込み時期だけでなく、資料請求をするなどの情報収集行動も含めた進路検討の開始時期自体が早期化してきている。時間をかけて進路を考える中でやはり大切にしたいのは、やりたい、学びたいという「動機のある選択」をすることだ。

【興味を持った学校の資料請求をした時期】



図版：すべて、リクルート進学総研「進学センサス2022」より

【第1志望の学校を決めた時期】



「やりたいこと×学びの中身」軸の進路選択

高 校生たち自身も、進学先選びにおいて、単にやりたいことの有無だけでなく、「やりたいこと×何を学ぶか」を重要な決め手とする傾向にある。入社から3年以内で約3割が転職を経験する現代(※1)、キャリア形成にも「動機のある選択」は欠かせない。進路選択はそのプレ体験として捉え、よく吟味する癖をつけておきたい。

【進学先検討時の重視項目の変遷】

	2016年	2019年	2022年
学びたい学部・学科・コースがあること	1位	1位	1位
自分の興味や可能性が上げられること	3位	3位	2位
教育方針・カリキュラムが魅力的であること	16位	12位	3位

※1：厚生労働省「新規卒就職者の離職状況(令和2年3月卒業者)」より

Topics

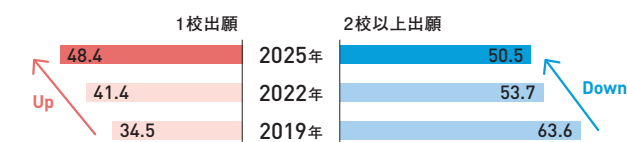
2

量から質へ、出願スタイルは「納得」重視へ。
自分らしさを軸にした進路選択が広がる

「複数」から見通しを持った「一校」へのシフト

大 学進学者を対象にした2025年のデータでは、出願校数「1校」と答えた生徒が48.4%に達し、2019年の34.5%から大きく増加した。複数出願が一般的だった時代から、確信を持って出願先を絞り込むスタイルへと明らかに変化している。この背景には、年内入試の活用が進み、早期に進路を検討・決定する流れが定着したことがある。単なる安全志向ではなく、事前の見通しを持って出願行動を組み立てる受験生が増えているといえる。

【大学出願校数の変遷】



両データ共に「2025年卒高校生の進路選択行動の実態～進学センサス2025～」リクルート進学総研より

「興味」や「得意」の一致が、進路への確信を支える

進 路選択の満足度を支える最大の要因は、「自分の興味や得意分野に合った進路を選んだ(72.8%)」ことにある。次いで「将来のキャリアや目標」が重視されており、生徒は自己の適性との合致を強く求めている。特に総合型・学校推薦型選抜では、自己表現や大学との相性といった主観的な適合感が納得感を高めている。今後は、生徒が自分らしい軸を見つけ、安心感を持って決断できるような心理的・情動的な支援を整えることがより求められる。

【進路選択について満足している点(大学進学者全体)】

1位	自分の興味や得意分野に合った進路を選んだ	72.8%
2位	将来のキャリアや目標につながる進路を選んだ	41.2%
3位	自分に合った入試・出願方法を選んだ	28.6%
4位	学びやすい環境が整っている学校を選んだ	26.4%
5位	進学先の学校が自分に合っていると感じる	24.1%

Topics

3

AI時代に光る「対話力」。
探究や特活など人間的な関わりが引き続き鍵に

AIスキルを上回る「コミュニケーション能力」

社 会の急激な変化を見据える中、高校生が「将来社会で働くにあたり特に必要になる」と考える能力のトップは「コミュニケーション能力(58.5%)」であることが最新の調査でわかった。次点の「AIを活用する力(43.0%)」を大きく上回っている。AIが普及し効率化が進む社会においてこそ、機械には代わることができない人間同士の対話が不可欠になると、生徒自身が時代を冷静に分析していることが読み取れる。

急速なAI技術の発達・社会変化の中で、
どのような力が必要になると思うか(高校生)

1位	コミュニケーション能力	58.5%
2位	AIを活用する力	43.0%
3位	問題解決能力	39.5%
4位	変化へ適応する力	39.1%
5位	想像的に思考する力	34.9%

両データ共に「高校生と保護者の進路に関する意識調査2025」一般社団法人全国高等学校PTA連合会×リクルートより

求められるのは「人間的な関わり」の継続

一方で生徒が「現在持っている能力」を見ると、「主体性」や「働きかけ力」が年々増加している。保護者からも、探究活動や学校行事など「人との関係」を通じた学びが、AIに代替されない力を育てていると評価する声が多い。AI社会においても、これまで学校現場が担ってきた人間的な関わりや指導が引き続き重要になるだろう。さらに今後は、進化の早いAI技術について教え込むのではなく、生徒の活用実態を把握し、共に学ぶ機会を持つことも新たな役割として求められるそう。

【現在持っていると思う能力(高校生)】

